

【資料】

岡山県における感染症の患者発生状況について (2019年)

Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Okayama in 2019
(Okayama Infectious Disease Surveillance Center)

北村雅美, 二階堂日出伸, 望月 靖

KITAMURA Masami, NIKAIDO Hidenobu, MOCHIZUKI Yasushi

[キーワード: 感染症, サーベイランス, 全数把握感染症, 定点把握感染症]

[Key words: Infectious disease, Epidemiological surveillance, Notifiable disease surveillance, Sentinel surveillance]

1 感染症発生動向調査

1.1 調査方法

感染症発生動向調査事業実施要綱(平成11年3月19日付け健医発第458号。以下「要綱」という。)に基づき、各関係機関から報告された患者情報を感染症サーベイランスシステムにより、国立感染症研究所感染症疫学センターへ報告しており、集計された全国の情報と比較しつつ、岡山県内の発生状況を解析した。

1.2 届出対象感染症

対象となる感染症は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(平成10年法律第104号。以下「感染症法」という。)により定められており、一類～五類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症に分類されている。一類～四類感染症、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症は全数把握対象に、五類感染症は、全数把握対象と定点把握対象に区分されている(表1)。

1.2.1 全数把握感染症

全数把握感染症とは、発生数が希少、又は周囲への感染拡大防止を図るため、発生した全ての患者を把握することが必要な感染症で、医師は該当する患者を診断したときには、最寄りの保健所へ届出することが、感染症法上規定されている。

1.2.2 定点把握感染症

定点把握感染症とは、発生動向の把握が必要な感染症のうち、患者数が多数で、その全てを把握する必要がないもので、指定された医療機関(定点)から発生状況が週単位又は月単位で届出されることになっている。定点医療機関は、要綱の基準に基づき選定されており、岡山県の場合、小児科定点54、内科定点30、眼科定点12、性感染症定点17、基幹定点5が設定され、小児科定点と内科定点をあわせて、インフルエンザ定点84となっ

ている。

定点把握感染症については、全国や過去のデータの比較においては、全ての定点医療機関から報告される患者数を定点医療機関数で割った値(以下「定点あたり報告数」という。)、又は年間の患者報告数を定点医療機関数で割った値(以下「定点あたり累積報告数」という。)を用いる。

1.3 調査期間

全数把握感染症(表1-1)及び月報告の定点把握感染症(表1-2-②)の調査期間は、2019年1月1日～12月31日、週報告の定点把握感染症(表1-2-①)については、2019年第1週～第52週(2018年12月31日～2019年12月29日)とした。なお、インフルエンザについては、流行時期にあわせて、第36週～翌年第35週(2018年9月3日～2019年9月1日)とした。また、いずれの感染症も診断日を基準とした。

2 結果

2.1 全数把握感染症の発生状況(表2, 3)

2.1.1 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

2.1.2 二類感染症

二類感染症は、結核の届出があった。急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る。)、中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る。)、鳥インフルエンザ(H5N1)、鳥インフルエンザ(H7N9)の届出はなかった。

i) 結核

結核は304例の届出があり、2017年から漸減傾向にあるが、毎年300例以上の届出が続いている(図1)。病型

は、患者181例、無症状病原体保有者116例、疑似症患者3例、死亡者3例、結核疑い死亡者1例で、無症状病原体保有者116例のうち17例が医療・介護関係者（医師、看護師、介護職など）であった。性別は男性172例、女性132例で、年齢階級別（図2）では60歳以上の高齢者が62%を占めていた。また、昨年と同様に、20歳代の男性で届出が多く見られた（29例）。なお、近年全国的に増加傾向にあった20歳代の若年層での新登録患者数は昨年と同様に多く（2018年は新登録患者15,590例中1,273例（8.2%）、2019年は14,460例中1,164例（8.0%））、引き続き、同年代における外国生まれの患者の発生（2018年、2019年の新登録患者における割合はそれぞれ70.4%、73.1%）が注目される¹⁾。

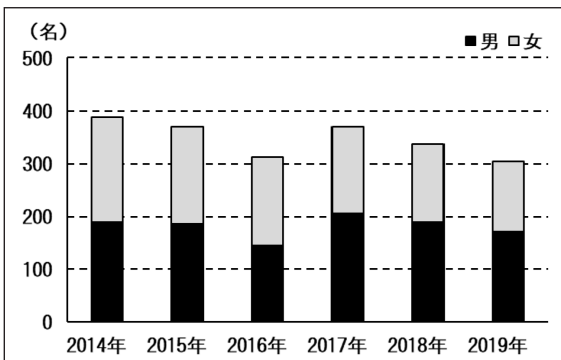


図1 結核 年次別発生状況

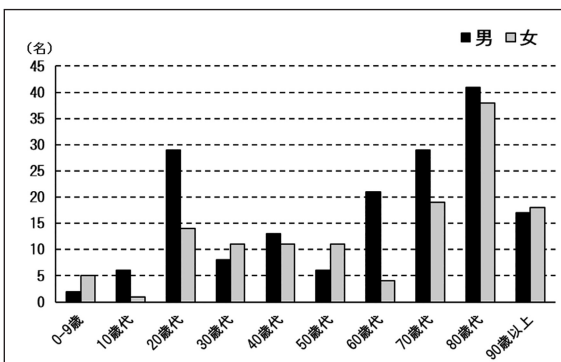


図2 結核 年齢階級別発生状況

2.1.3 三類感染症

三類感染症は、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症の届出があった。コレラ、腸チフス、パラチフスの届出はなかった。

i) 細菌性赤痢

細菌性赤痢は4例の届出があり、性別は男性1例、女性3例で例年並みであった（図3）。年齢階級別では20歳代（2例）、30歳代及び40歳代（各1例）の順が多かった。推定感染地域は、国外が3例（インドネシア及びフィ

リピン）、国内が1例（都道府県不明）で、感染原因・経路は、国外感染においては経口感染（肉類、生野菜、果物等）によるものであった。

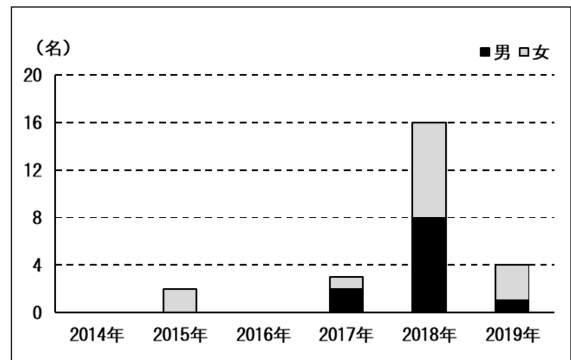


図3 細菌性赤痢 年次別発生状況

ii) 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は62例の届出があり、例年並みであった（図4）。病型は、患者37例、無症状病原体保有者25例であった。性別は男性18例、女性44例で、年齢階級別では、30歳代（12例）、0～9歳及び50歳代（各10例）の順が多かった。月別発生状況は6月（15例）、9月（10例）、5月及び7月（各8例）の順に多くなっており、春～秋にかけて多くの届出があった（図5）。血清群別の内訳は、図6のとおりであった。

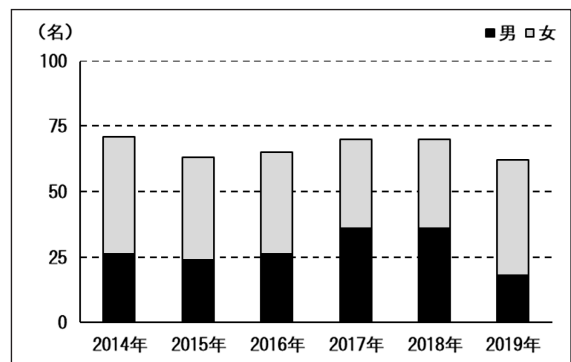


図4 腸管出血性大腸菌感染症 年次別発生状況

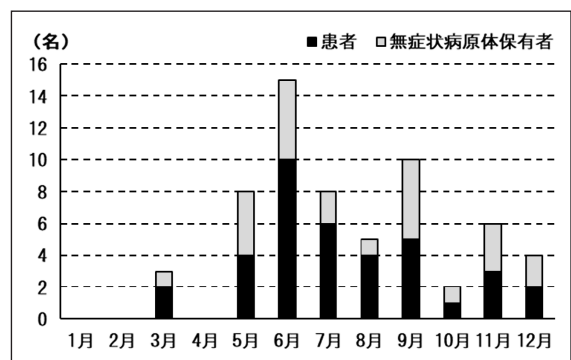


図5 腸管出血性大腸菌感染症 月別発生状況

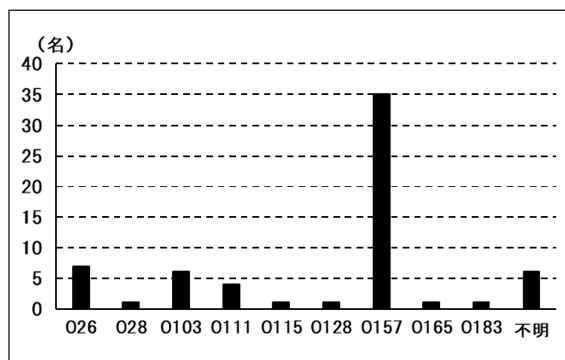


図6 腸管出血性大腸菌感染症 O血清群発生状況

2.1.4 四類感染症

四類感染症は、E型肝炎、A型肝炎、重症熱性血小板減少症候群、つつが虫病、デング熱、日本紅斑熱、ポツリヌス症、ライム病、レジオネラ症の届出があった。その他の四類感染症の届出はなかった。

i) E型肝炎

E型肝炎は1例の届出があり、40歳代の男性であった。推定感染地域は、国内（都道府県不明）で、感染原因・経路は不明であった。

ii) A型肝炎

A型肝炎は1例の届出があり、50歳代の男性であった。推定感染地域は、国内（県内）で、感染原因・経路は不明であった。

iii) 重症熱性血小板減少症候群

重症熱性血小板減少症候群は3例の届出があり、前年（2例）とほぼ同数であった。2013年に感染症法で全数把握疾患となってからの累計は10例となった。4月、7月及び10月に届出があり、50歳代の男性1例と80歳代の女性2例であった。推定感染地域は全て国内（県内）で、感染原因・経路は、2例は動物・蚊・昆虫等からの感染が疑われ（1例は特にマダニと推定）、1例は不明であった。

iv) つつが虫病

つつが虫病は3例の届出があり、前年（2例）とほぼ同数であった。6月と10月に届出があり、30歳代、60歳代及び80歳代（各1例）の男性であった。推定感染地域は、全て国内（県内）であった。

v) デング熱

デング熱は7例の届出があり、前年（0例）から増加した。年齢階級別では30歳代（4例）、40歳代（2例）、50歳代（1例）の順に多かった。推定感染地域は、全て国外（カンボディア、ジャマイカ、タイ、バングラデシュ、ベトナム及びマレーシア）で、感染原因・経路は、動物・蚊・昆虫等からの感染（5例）、不明（2例）であった。

vi) 日本紅斑熱

日本紅斑熱は3例の届出があり、前年（5例）とほぼ同数であった。2009年10月の県内初の届出以来の累計報告数は34例となった。10月（2例）と5月（1例）に届け出があり、60歳代の男性と女性が各1例ずつ、80歳代の男性が1例であった。

推定感染地域は、全て国内（県内）で、マダニの刺し口が2例で確認された。

vii) ポツリヌス症

ポツリヌス症は1例の届出があり、乳児男性であった。感染原因・経路は経口感染であり、飲食物の種類は、野菜スープであった。

viii) ライム病

ライム病は、1例の届出があり、60歳代の男性であった。感染症サーベイランスシステムでの調査開始以来初めての届出となった。感染原因・経路（確定）はマダニで、感染地域（確定）は、スウェーデンであった。

ix) レジオネラ症

レジオネラ症は58例の届出があり、2年連続で例年（30例前後）の2倍程度の届出となった（図7）。病型は全て肺炎型であった。性別は男性52例、女性6例で、年齢階級別では70歳代（21例）、60歳代（19例）、50歳代（7例）の順に多かった（図8）。感染原因・経路は、水系感染20例、塵埃感染5例、その他1例、不明33例であった（重

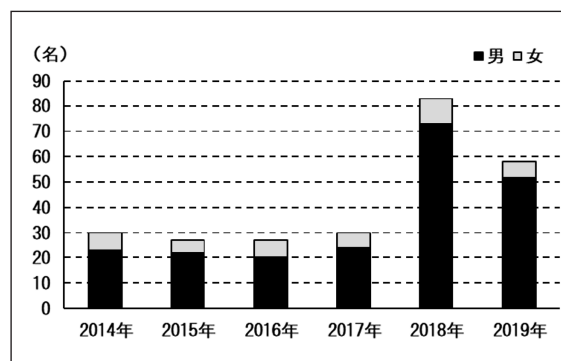


図7 レジオネラ症 年次別発生状況

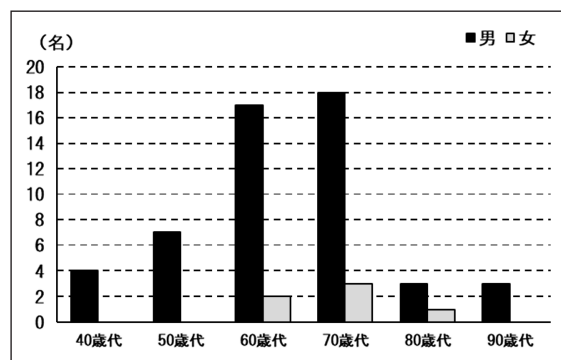


図8 レジオネラ症 年齢階級別発生状況

複あり)。水系感染のうち、入浴施設の利用が9例、加湿器の使用が2例で確認された。塵埃感染のうち、3例で家庭菜園等での農作業の履歴が確認された。

2.1.5 五類感染症（全数把握対象）

五類感染症では、17の感染症で届出があった。クリプトスポリジウム症、ジアルジア症、侵襲性髄膜炎菌感染症、先天性風しん症候群、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、麻しん、薬剤耐性アシネトバクター感染症の届出はなかった。

i) アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は14例の届出があり、前年（15例）とほぼ同数であった（図9）。病型は全て腸管アメーバ症であった。性別は男性13例、女性1例で、年齢階級別では50歳代（7例）、60歳代（4例）、30歳代、40歳代及び70歳代（各1例）の順に多く、患者は全て30歳以上の成人であった（図10）。推定感染地域は県内5例、都道府県不明4例、不明5例であった。感染原因・経路は性的接触3例、経口感染2例の他は不明であった。

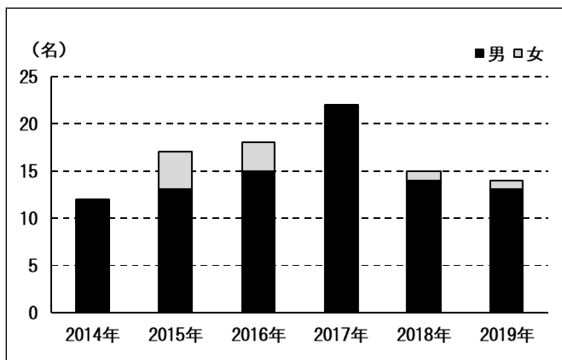


図9 アメーバ赤痢 年次別発生状況

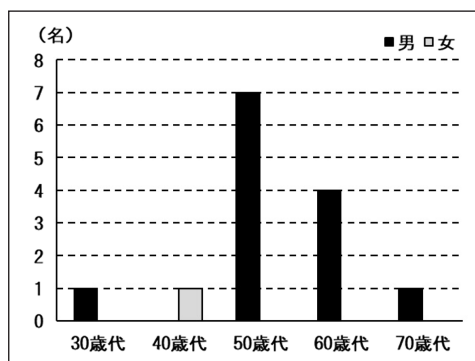


図10 アメーバ赤痢 年齢階級別発生状況

ii) ウイルス性肝炎（E型肝炎及びA型肝炎を除く）

ウイルス性肝炎は12例の届出があり、前年（5例）から増加した（図11）。性別は男性8例、女性4例であった。年齢階級別では20歳代（6例）、30歳代及び50歳代（各2例）の順に多かった（図12）。病型は、B型が9例、C

型が2例、その他（Epstein-Barr virus：EBウイルス）が1例であった。推定感染地域は国内が10例（県内7例、県外1例、都道府県不明2例）、国外（タイ）1例、不明が2例（重複あり）で、感染原因・経路は、性的接触7例（同性間1例、異性間4例、不明2例）、不明5例であった。

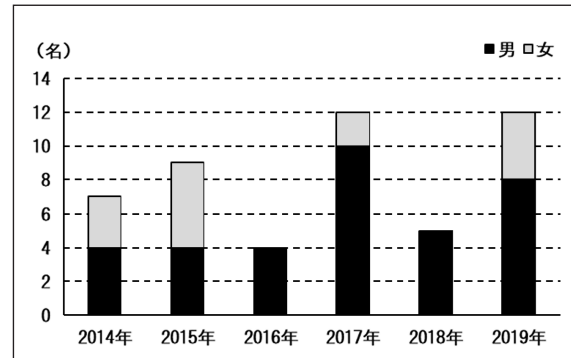


図11 ウイルス性肝炎 年次別発生状況

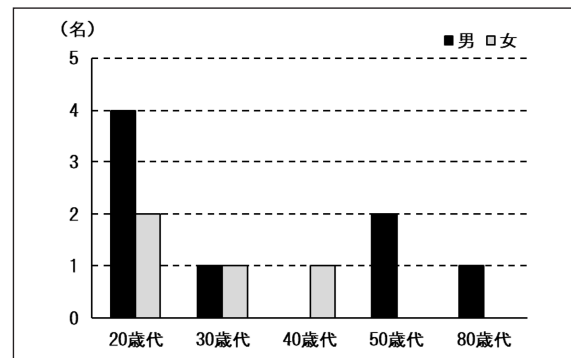


図12 ウイルス性肝炎 年齢階級別発生状況

iii) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症は32例の届出があり、前年（26例）から増加した（図13）。性別は男性16例、女性16例で、年齢階級別（図14）では70歳代（14例）、60歳代（6例）、40歳代、80歳代（5例）の順に多く、60歳以上で81%を占めていた。感染原因・経路は、以前からの保菌（12例、うち腸管（5例）が最多）、医療器具関連（5例）、院内感染（3例）の順に多かった。

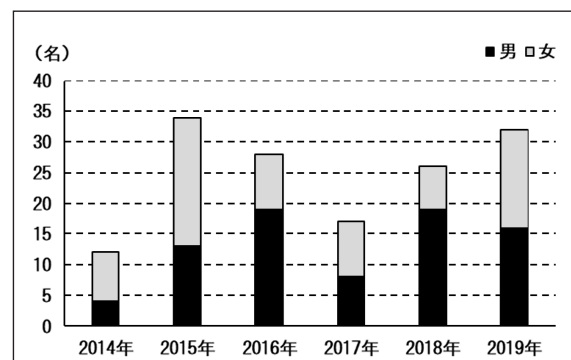


図13 カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 年次別発生状況

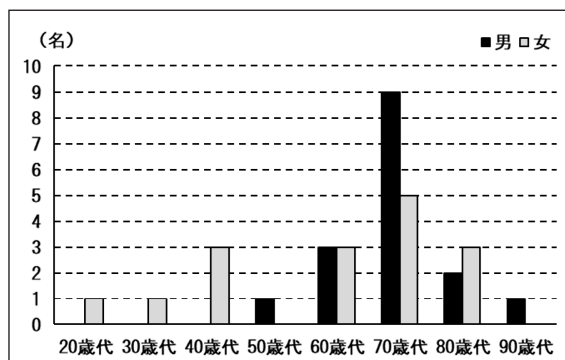


図14 カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 年齢階級別発生状況

iv) 急性弛緩性麻痺（急性灰白髄炎を除く。）

急性弛緩性麻痺は2例の届出があり、2歳以下の幼児男性であった。2例のうち1例は病原体不明（エンテロウイルス陰性）であったが、1例からコクサッキーウイルスA6が検出された。

v) 急性脳炎（ウエストナイル脳炎，西部ウマ脳炎，ダニ媒介脳炎，東部ウマ脳炎，日本脳炎，ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。）

急性脳炎は19例の届出があり、前年（6例）から増加した（図15）。検出された病原体は、インフルエンザウイルスA（6例），RSウイルス，エンテロウイルス，単純ヘルペスウイルス，ヒトヘルペスウイルス（HHV-6）及びヒトメタニューモウイルスが各1例ずつ，病原体不明8例であった。性別は男性6例，女性13例で，年齢階級別では10歳未満（13例），10歳代（2例），40歳代，60歳代，70歳代及び80歳代（各1例）の順に多かった。

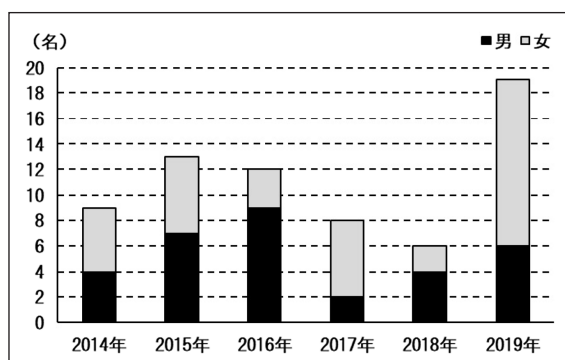


図15 急性脳炎 年次別発生状況

vi) クロイツフェルト・ヤコブ病

クロイツフェルト・ヤコブ病は5例の届出があった。性別は男性1例，女性4例で，年齢階級別では，60歳代及び80歳代（各2例），90歳代（1例）の順に多かった。病型は，孤発性プリオン病（古典型）4例，遺伝性プリオン病（家族性）1例であった。

vii) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は6例の届出があり，過去5年間と比較して最も多かった2018年（14例）からは減少し，例年と同程度であった（図16）。性別は男性1例，女性5例で，年齢階級別では80歳代（2例），10歳未満，60歳代，70歳代及び90歳代（各1例）の順に多く，感染原因・経路は，創傷感染3例，飛沫・飛沫核感染1例，不明2例であった。

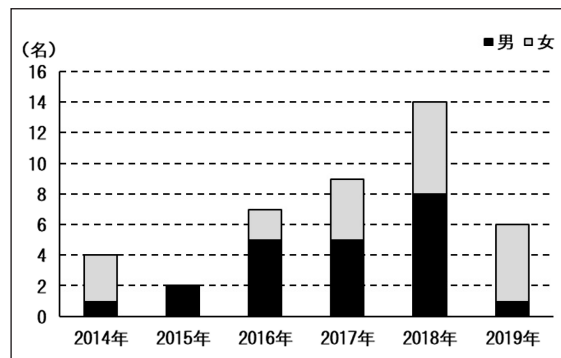


図16 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 年次別発生状況

viii) 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は10例の届出があり，前年（18例）から減少し，過去5年間と比較して最も少なかった（図17）。性別は男性9例，女性1例で，年齢階級別では20歳代（5例），40歳代（2例）の順に多かった（図18）。病型はAIDS 2例，無症候性キャリア8例であった。

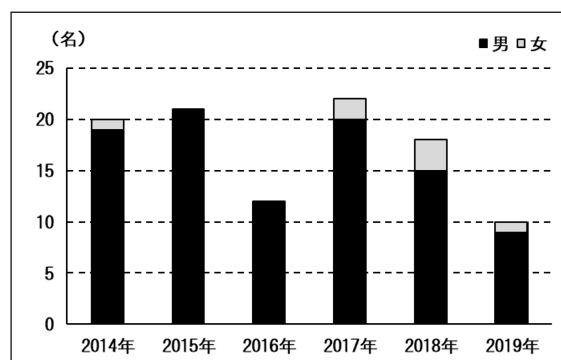


図17 後天性免疫不全症候群 年次別発生状況

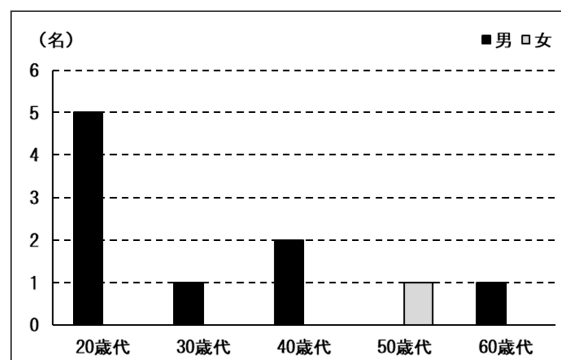


図18 後天性免疫不全症候群 年齢階級別発生状況

推定感染地域は、国内8例、国外（アメリカ合衆国）1例、不明1例であった。感染原因・経路は性的接触9例（異性間4例、同性間5例）、不明1例であった。

ix) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

侵襲性インフルエンザ菌感染症は4例の届出があり、性別は男性3例、女性1例で、年齢階級別では60歳代から90歳代までの各1例ずつであった。感染原因・経路は、飛沫・飛沫核感染2例、不明2例であった。

x) 侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は47例の届出があり、前年（43例）とほぼ同数であった（図19）。性別は男性27例、女性20例で、年齢階級別では、60歳代（11例）、70歳代（10例）、0～9歳（8例）の順に多かった（図20）。ワクチン接種歴別でみると、接種歴あり15例、接種歴なし13例、不明19例であった。

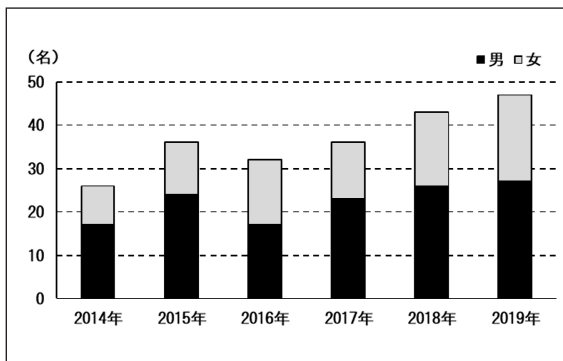


図19 侵襲性肺炎球菌感染症 年次別発生状況

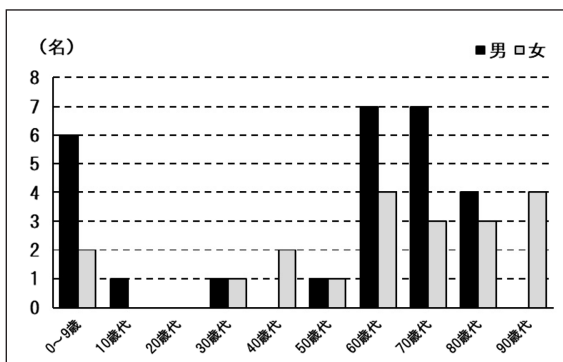


図20 侵襲性肺炎球菌感染症 年齢階級別発生状況

xi) 水痘（入院例に限る。）

水痘（入院例に限る。）は9例の届出があった。性別は男性7例、女性2例で、年齢階級別では、20歳代、60歳代、70歳代及び90歳代（各2例）、10歳代（1例）の順に多かった。感染原因・経路は、水痘患者との接触3例、その他2例、不明4例であった。

xii) 梅毒

梅毒は191例の届出があった。過去5年間で比較する

と、感染症法が施行された1999年以降で最多の届出数となった（図21）。病型は早期顕症梅毒Ⅰ期86例、早期顕症梅毒Ⅱ期61例、晩期顕症梅毒1例、無症状病原体保有者42例、先天梅毒1例であった。性別は男性124例、女性67例で、年齢階級別では、男性は30歳代（36例）、20歳代（34例）、40歳代（26例）の順、女性は20歳代（33例）、40歳代（11例）、10歳代（9例）の順に多かった（図22）。特に女性は10歳代及び20歳代で女性全体の63%を占めていた。10歳代及び20歳代の女性の届出数は、年々増加傾向を示している（図23）。推定感染地域は国内175例（県内131例、県外33例、都道府県不明11例）、国外1例（中華人民共和国）、不明17例であった（重複あり）。感染原因・経路は、性的接触174例（異性間151例、同性間7例、異性間及び同性間2例、詳細不明14例）、

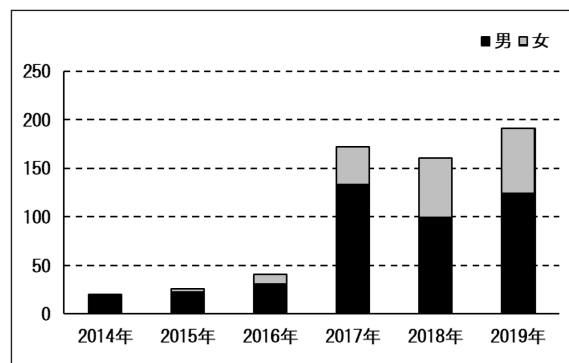


図21 梅毒 年次別発生状況

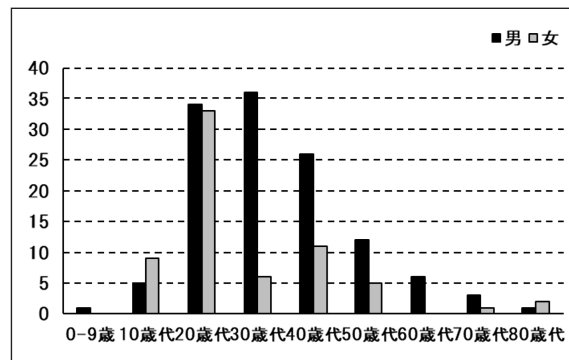


図22 梅毒 年齢階級別発生状況

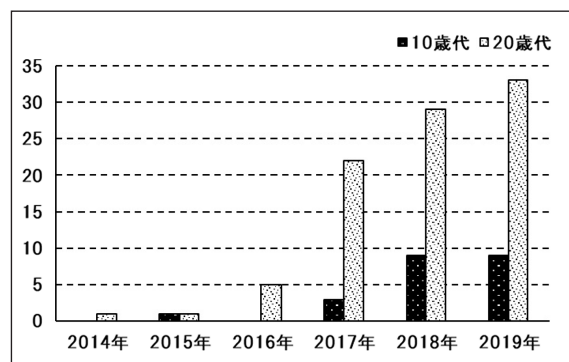


図23 梅毒 年次別発生状況（10歳代・20歳代女性）

胎内・出産時1例，不明16例であった。

なお，梅毒の感染症法に基づく届出様式については，平成31年1月1日から「性風俗産業の従事歴・利用歴の有無（直近6か月以内）」等が記載項目として新たに追加されており，男性感染者のうち48.8%（60例）が性風俗産業の利用歴があり，年齢階級別では，30歳代（23例）の利用が最も多く，次いで20歳代（18例），40歳代（9例）の順で多かった（図24）。また，女性感染者の17.9%（12例）が性風俗産業の従事歴があり，年齢階級別では，20歳代83.3%（10例）が最も多かった（図25）。

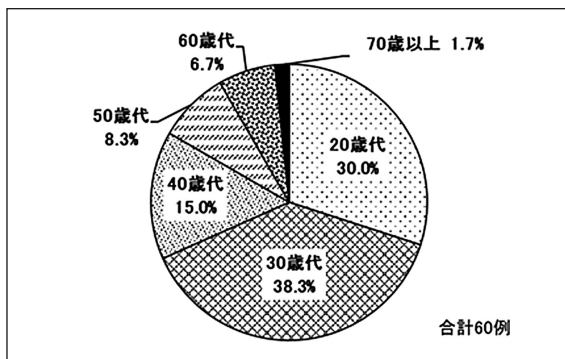


図24 梅毒 年齢階級別（男性・性風俗産業の利用歴有）

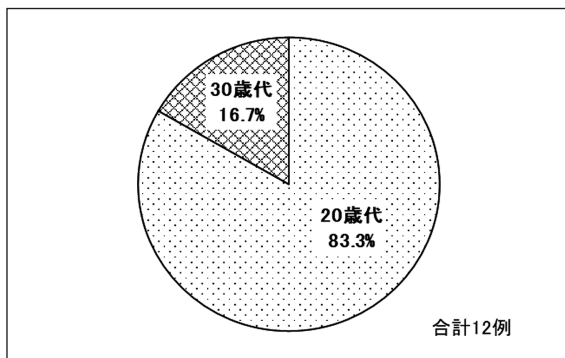


図25 梅毒 年齢階級別（女性・性風俗産業従事歴有）

xiii) 播種性クリプトコックス症

播種性クリプトコックス症は1例の届出があった。患者は70歳代の男性で，感染原因・経路は免疫不全，推定感染地域は国内（県内）であった。

xiv) 破傷風

破傷風は，3例の届出があった。性別は男性1例，女性2例で，年齢階級別では，40歳代，70歳代及び80歳代（各1例）であった。感染原因・経路は創傷感染，その他及び不明（各1例）であった。

xv) バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症は，3例の届出があった。性別は男性2例，女性1例で，年齢階級別では，70歳代（2例），50歳代（1例）の順に多かった。感染原

因・経路は，針等の鋭利なものの刺入による感染，その他，不明（各1例）であった。推定感染地域は国内（県内），国外（アメリカ合衆国），不明（各1例）であった。

xvi) 百日咳

百日咳は，428例の届出があり，昨年（187例）より増加した。性別は男性189例，女性239例で，月別の発生状況では，7月（69例），9月（65例），8月（59例）の順に多かった（図26）。年齢階級別では，小学生（195例），その他（107例），幼児（63例）の順に多く（図27），「その他」の中では30歳代及び40歳代が半分以上を占めていた。届出が多かった小学生の患者のうち，82%が遅くとも5歳までに百日咳ワクチンの接種を4回受けていた（図28）。また，重症化のリスクが高い6か月未満児では15例の届出があり，6例は同胞から，4例は

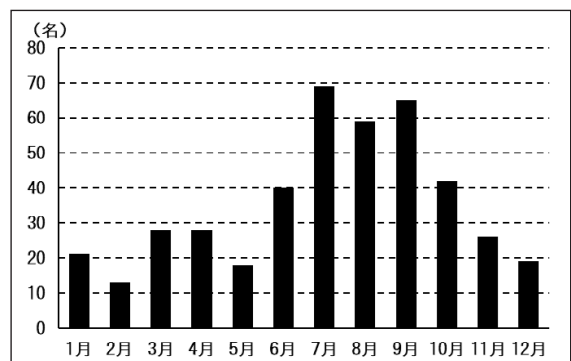


図26 百日咳 月別発生状況

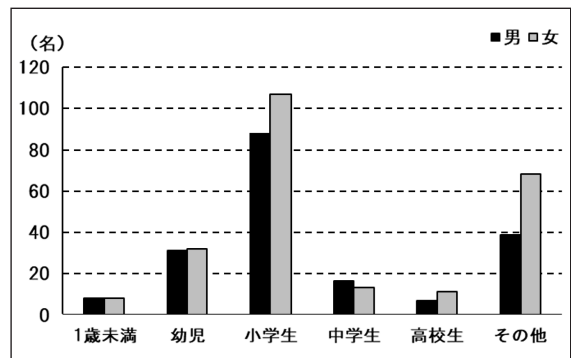


図27 百日咳 年齢階級別発生状況

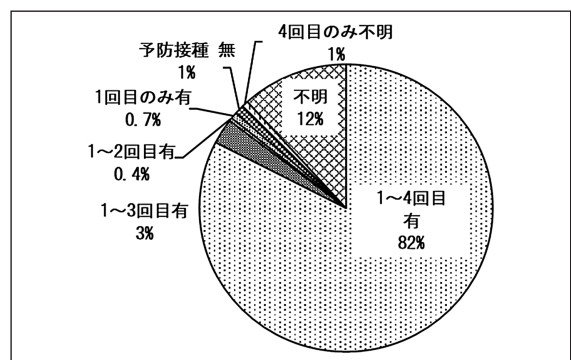


図28 百日咳 予防接種状況（小学生）

祖父母や両親からの感染が推定され、15例中5例が入院していた。6か月未満児の感染源の多くが同胞であったことから、全国のサーベイランス同様、学童期における百日咳含有ワクチンの追加接種等の対策の必要性が示唆された²⁾。

xvii) 風しん

風しんは、3例の届出があり、昨年(29例)より減少した(図29)。性別は全て男性で、年齢階級別では、20歳代、30歳代及び50歳代(各1例)であった。

2018年及び2019年の年齢階級別発生状況(図30)を見ると、40歳代(11例)、50歳代(8例)、30歳代(6例)の順に多く、全国的に風しんの抗体保有率が低い40歳代及び50歳代に加え、ワクチンが医療機関での1回のみ個別接種であったため接種率が低いとされている30歳代の感染も見られた。

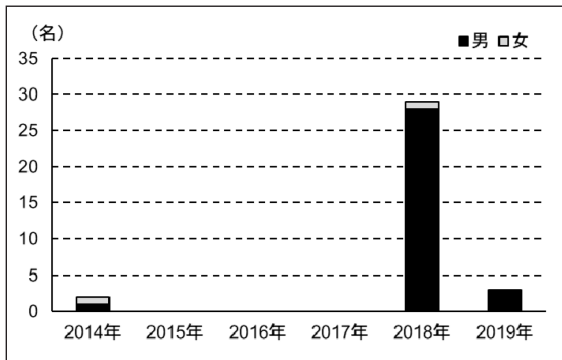


図29 風しん 年次別発生状況

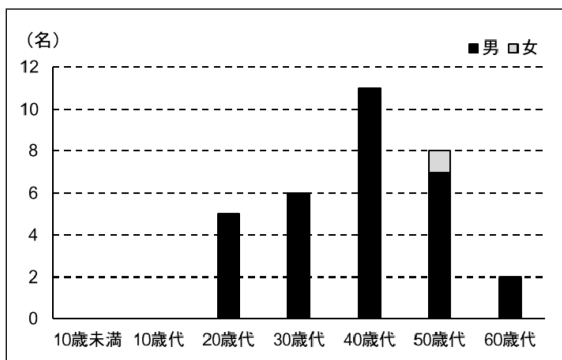


図30 風しん 年齢階級別発生状況(2018~2019年)

2.2 定点把握感染症(五類感染症)の届出状況

2.2.1 小児科・内科定点における週報告の感染症(表4)

小児科・内科定点における週報告の感染症のうち、主な感染症については、以下のとおりである。

i) インフルエンザ(2018/19年シーズン流行のまとめ)(図31)

2018/19年シーズン(2018/9/3~2019/9/1)、岡山県の患者報告数は、20,844人であった。これは、過去5シ

ズンと比較すると、2013/14年シーズンに次いで少なかった。2018年第36週(9/3~9/9)にシーズン初めての患者が報告され、第49週(12/3~12/9)には定点あたり報告数1.17人となり、過去5シーズンと比較すると、2016/17年シーズン、2017/18年シーズンに次いで3番目に早い流行シーズン入りとなった。その後、流行は拡大し、2019年第3週(1/14~1/20)に定点あたり報告数45.33人となり、警報発令基準の30.00人を上回り、2018/19年シーズンのピークを迎えた。なお、第4週に定点あたり報告数が47.56人となったが、これは、過去5シーズン中、2014/15年シーズンの第3週(59.21人)、第4週(58.98人)に次いで3番目に多かった。その後、第8週(2/18~2/24)に9.00人、第9週(2/25~3/3)に6.65人と2週連続して定点あたり10.00人を下回ったため、警報から注意報に切り替えた。第14週(4/1~4/7)に0.94人、第15週(4/8~4/14)に0.88人と、2週連続して1.00人を下回り、県内に発令していた「インフルエンザ注意報」を4月18日をもって解除した。注意報解除後の第16週(4/15~4/21)に1.43人、第17週(4/22~4/28)に1.08人と定点あたり1.00人を再び上回ったが、その後、患者数は徐々に減少し、2018/19年シーズンのインフルエンザの流行は終息した。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では4~6歳が14.9%と最も高かった。2017/18年シーズンと比較すると、20歳代及び30歳代での割合が増加した。

2018/19年シーズンに岡山県環境保健センターで検出されたインフルエンザウイルスは59株であった。その内訳は、AH3亜型36株(61%)が最も多く、次いでAH1pdm09型16株(27%)、B型7株[ビクトリア系統5株・山形系統2株](12%)であった。2017/18年シーズンは、A型とB型がほぼ同程度流行したが、2018/19年シーズンは1月初旬までは2種類のA型(AH1pdm09型及びAH3亜型)がほぼ同程度流行し、1月中旬以降はAH3亜型が主流となった。また、3月下旬からB型(ビクトリア系統)が増え始め、4月下旬まで検出された。

ii) RSウイルス感染症(図32)

RSウイルス感染症は、定点あたり累積報告数が30.96人であり、前年(23.70人)より増加した。第29週(7/15~7/21)から増加しはじめ、第37週(9/9~9/15)には定点あたり報告数3.09人となり、昨年と同時期にピークを迎えた。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では2歳以下の割合が全体の90%を占めた。

iii) 咽頭結膜熱(図33)

咽頭結膜熱は、定点あたり累積報告数が23.06人であ

り、前年（12.96人）から増加した。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では6歳以下の乳幼児の割合が全体の85%を占めた。

iv) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎（図34）

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、定点あたり累積報告数が68.46人であり、前年（82.83人）から減少した。全国と比較すると、ほぼ年間を通して低いレベルで推移した。年齢階級別では、6歳以下の乳幼児の割合が全体の

59%を占めた。

v) 感染性胃腸炎（図35）

感染性胃腸炎は、定点あたり累積報告数が295.50人であり、前年（340.35人）からわずかに減少した。1月にピークがあり（第2週，11.24人），その他はほぼ横ばいで推移した。全国と比較すると、年間を通して若干多めに推移した。年齢階級別では6歳以下の乳幼児の割合が全体の65%を占めた。

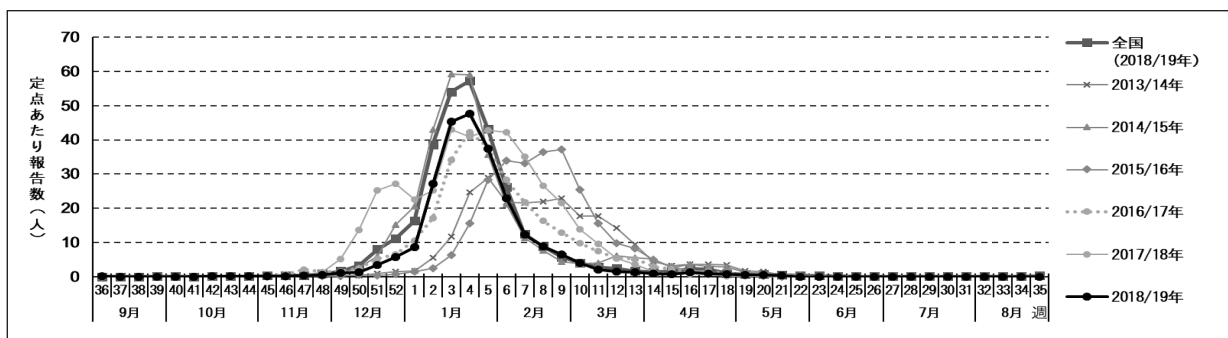


図31 インフルエンザ 発生状況

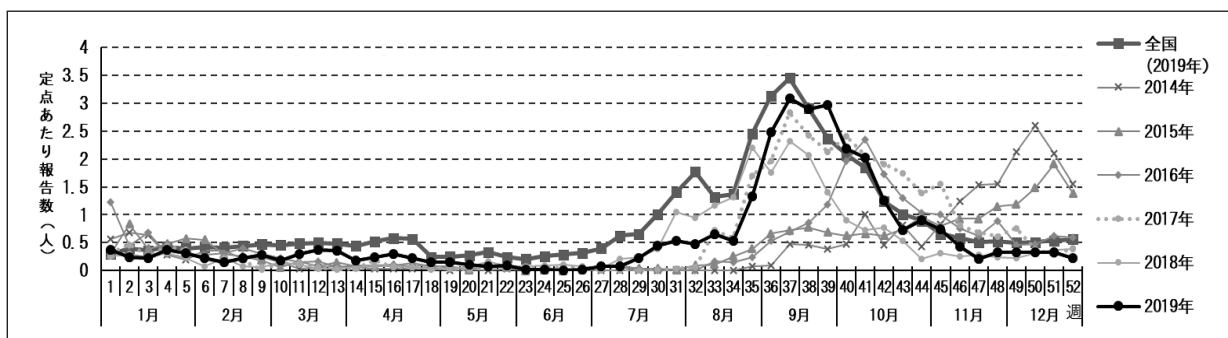


図32 RSウイルス感染症 発生状況

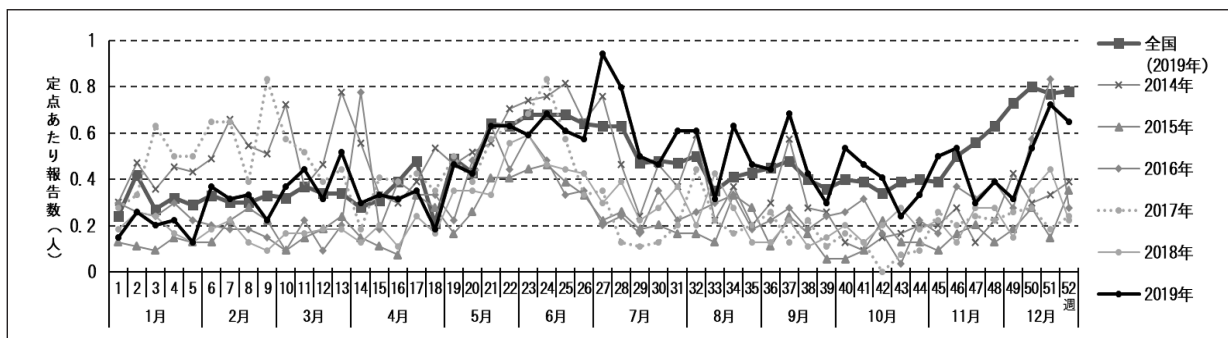


図33 咽頭結膜熱 発生状況

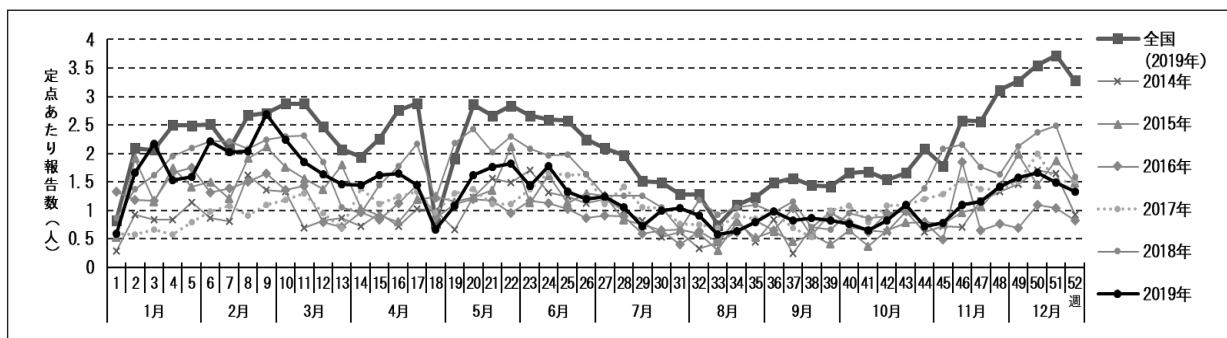


図34 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 発生状況

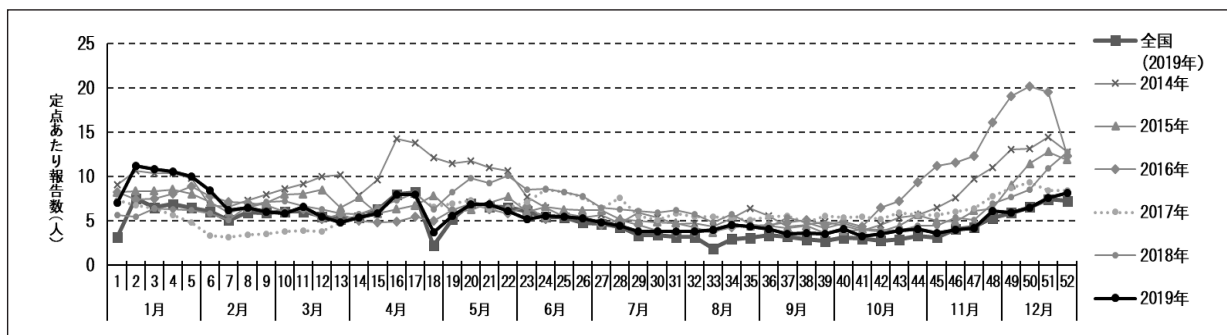


図35 感染性胃腸炎 発生状況

vi) 水痘 (図36)

水痘は、定点あたり累積報告数が11.69人であり、前年(14.43人)から減少した。過去5年間と比較すると、最も少なかった。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では6歳以下の乳幼児の割合が全体の45%を占めた。

vi) 手足口病 (図37)

手足口病は、定点あたり累積報告数が116.43人であり、前年(17.48人)から大きく増加した(手足口病は隔年で流行する傾向がある)。全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では1歳以下の割合が全体の45%を占めた。

vii) 伝染性紅斑 (図38)

伝染性紅斑は、定点あたり累積報告数が15.30人であり、前年(4.76人)から増加した。全国では、年間を通じて定点あたり報告数0.40~1.00人の間を推移したが、岡山県では9月にピークがあった(第36週, 0.94人)他は、年間を通して低いレベルで推移した。年齢階級別では6歳以下の乳幼児の割合が全体の71%を占めた。

viii) 突発性発しん (図39)

突発性発しんは、定点あたり累積報告数が13.94人であり、前年(19.33人)から減少した。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では1歳以下の割

合が全体の87%を占めた。

ix) ヘルパンギーナ (図40)

ヘルパンギーナは、定点あたり累積報告数が24.37人であり、前年(15.07人)から増加した。全国では、7月に流行のピーク(第30週, 2.98人)があったが、岡山県では6月に流行のピーク(第26週, 2.50人)があった。年齢階級別では1歳以下(44%), 2~3歳(29%), 4~5歳(14%)の順で多かった。

x) 流行性耳下腺炎 (図41)

流行性耳下腺炎は、定点あたり累積報告数が3.52人であり、前年(5.26人)から減少した。年間を通して全国とほぼ同様に推移した。年齢階級別では6歳以下の乳幼児の割合が全体の64%を占めた。

2.2.2 眼科定点における週報告の感染症 (表4)

i) 急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎は、定点あたり累積報告数が1.17人であり、前年(1.33人)からわずかに減少した。

ii) 流行性角結膜炎 (図42)

流行性角結膜炎は、定点あたり累積報告数が24.25人であり、前年(39.17人)から減少した。年齢階級別では9歳以下(25%), 30歳代(22%), 20歳代(16%)の順で多く、若年層の患者がより多く報告された。

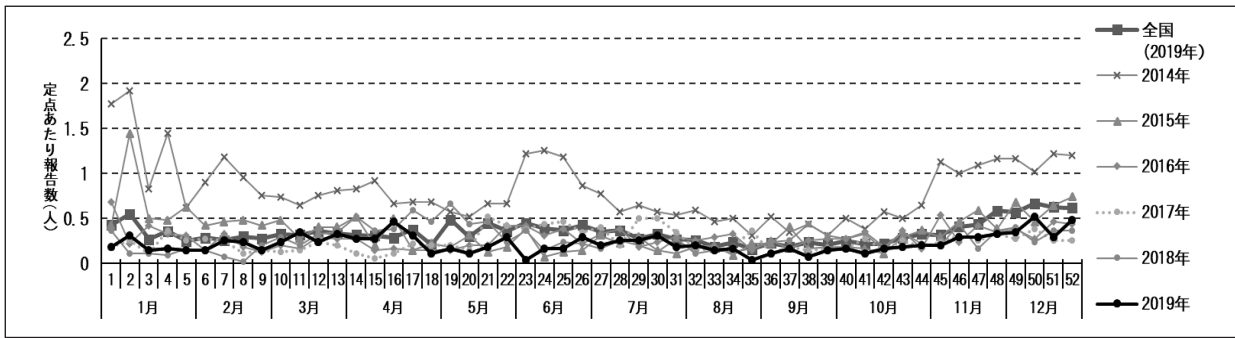


図36 水痘 発生状況

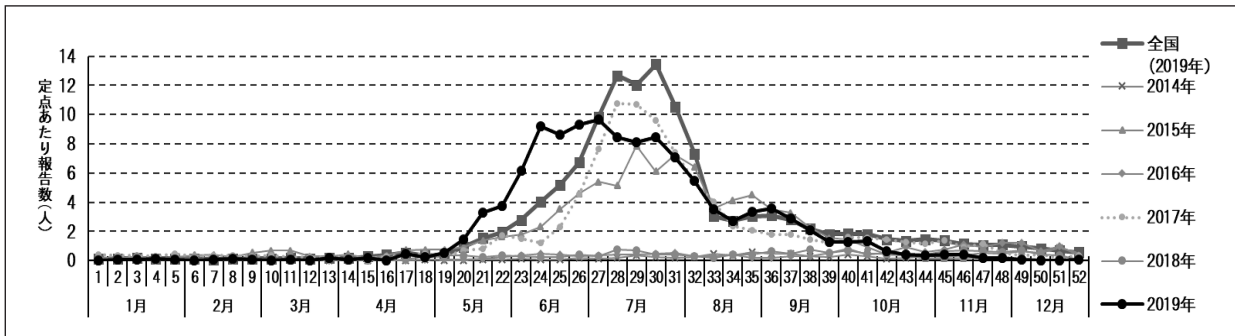


図37 手足口病 発生状況

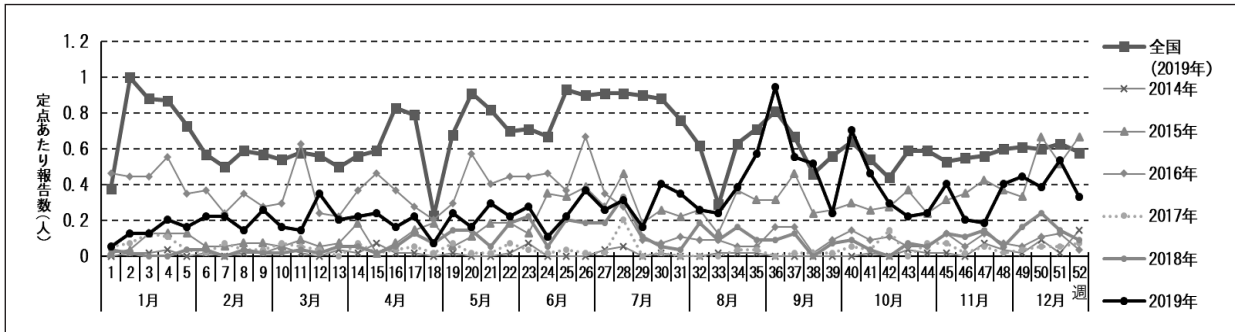


図38 伝染性紅斑 発生状況

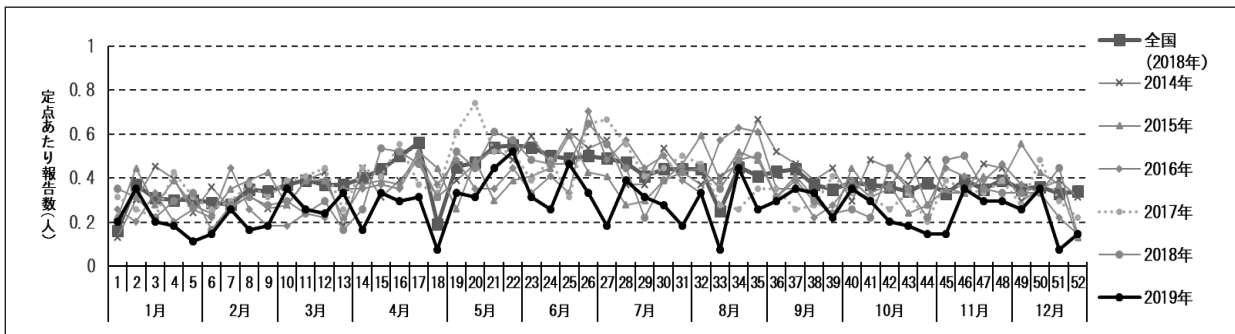


図39 突発性発しん 発生状況

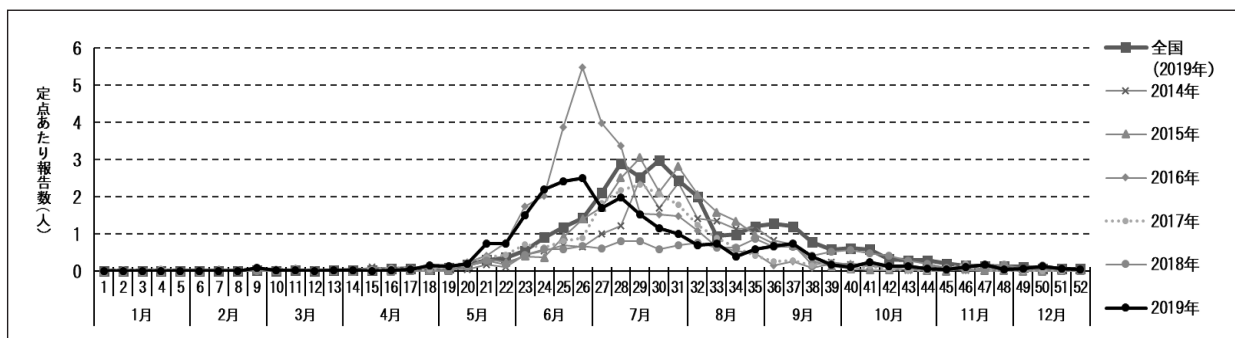


図40 ヘルパンギーナ 発生状況

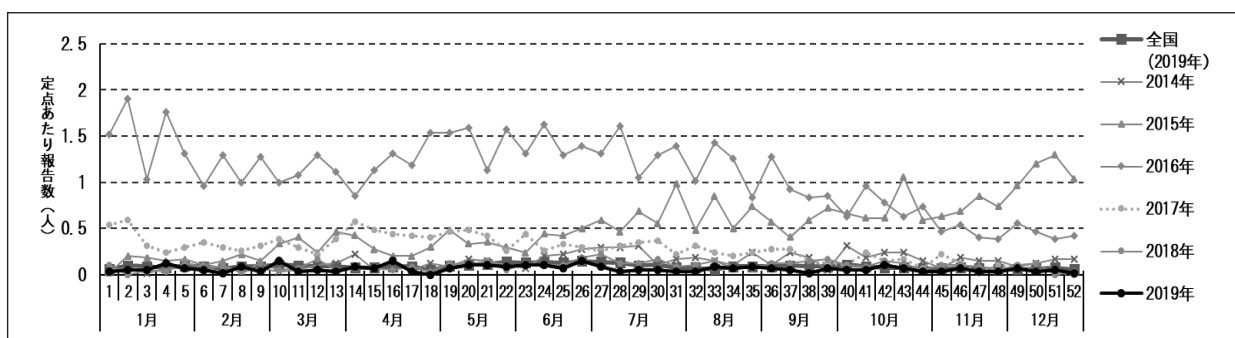


図41 流行性耳下腺炎 発生状況

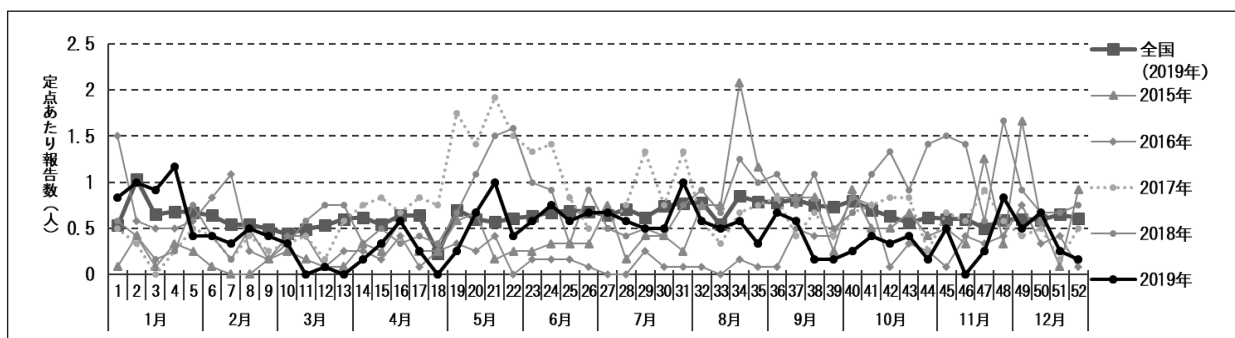


図42 流行性角結膜炎 発生状況

2.2.3 基幹定点における週報告の感染症 (表4)

i) 細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌肺炎球菌, インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く。)

細菌性髄膜炎は, 定点あたり累積報告数が2.60人であり, 前年 (1.20人) から増加した。

ii) 無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎は, 定点あたり累積報告数が1.40人であり, 前年 (0.80人) から増加した。

iii) マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎は, 定点あたり累積報告数が5.60人であり, 前年 (4.60人) からわずかに増加した。

iv) クラミジア肺炎 (オウム病を除く。)

クラミジア肺炎 (オウム病を除く。) は, 定点あたり累積報告数が0.20人であり, 前年 (0人) から増加した。

v) 感染性胃腸炎 (病原体がロタウイルスであるものに限る。)

感染性胃腸炎 (病原体がロタウイルスであるものに限る。) は, 定点あたり累積報告数が9.20人であり, 前年 (5.40人) から増加した。

2.2.4 性感染症定点における月報告の感染症 (表5, 6)

i) 性器クラミジア感染症

性器クラミジア感染症は, 定点あたり累積報告数が

18.35人であり、前年（18.00人）とほぼ同数であり、昨年と同様、全国と比較して少ない報告数であった（図43）。性別では男性17%，女性83%で、女性の割合が高かった。年齢階級別では10～50歳代で報告されており、20歳代が最も多かった（図44）。

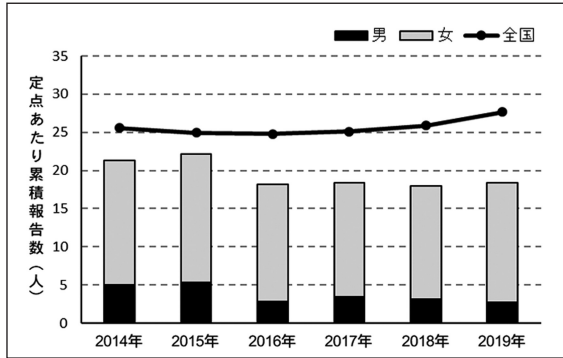


図43 性器クラミジア感染症 年次別発生状況

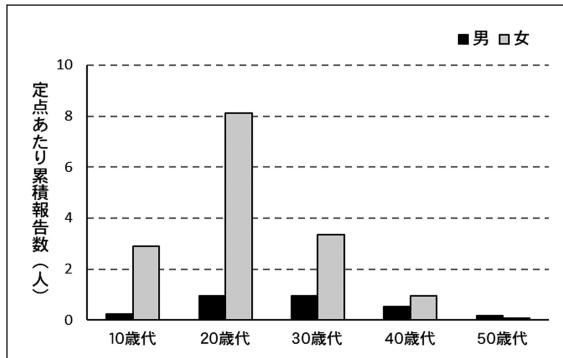


図44 性器クラミジア感染症 年齢階級別発生状況

ii) 性器ヘルペスウイルス感染症

性器ヘルペスウイルス感染症は、定点あたり累積報告数が3.88人で、前年（3.71人）とほぼ同数であった。全国と比較して少ない報告数であった（図45）。性別では男性2%，女性98%で、女性の割合が高かった。年齢階級別では20歳代が最も多かった（図46）。

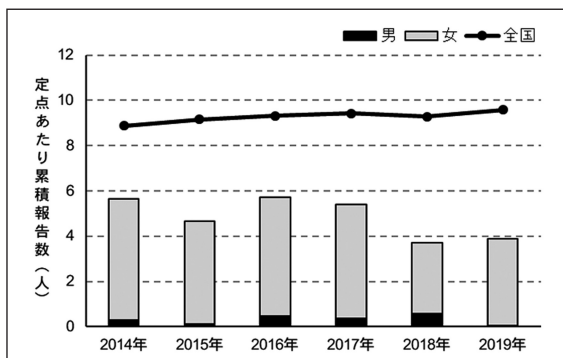


図45 性器ヘルペスウイルス感染症 年次別発生状況

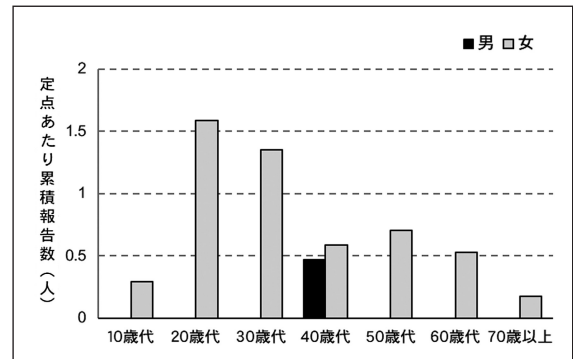


図46 性器ヘルペスウイルス感染症 年齢階級別発生状況

iii) 尖圭コンジローマ感染症

尖圭コンジローマ感染症は、定点あたり累積報告数が2.82人で、前年（6.24人）から減少した。過去5年間と比較して最も少なかった（図47）。性別では男性67%，女性33%で、男性の割合が多かった。年齢階級別では、20歳代～40歳代が多かった（図48）。

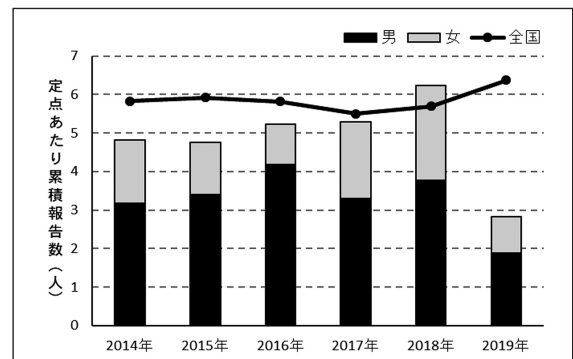


図47 尖圭コンジローマ感染症 年次別発生状況

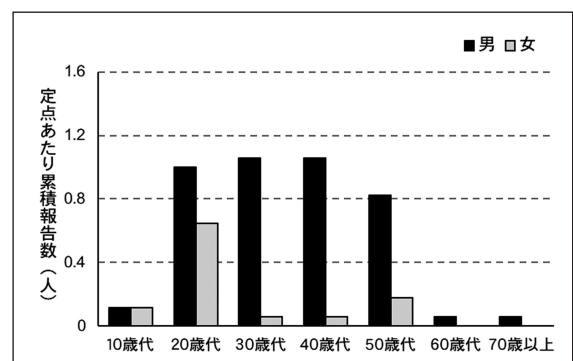


図48 尖圭コンジローマ感染症 年齢階級別発生状況

iv) 淋菌感染症

淋菌感染症は、定点あたり累積報告数が3.59人であり、前年（5.06人）から減少した（図49）。2014年から減少傾向にあり、全国と比べても少ない報告数であった。性別は男性57%、女性43%で、男性の報告数がやや多かった。年齢階級別では、20歳代が最も多かった（図50）。

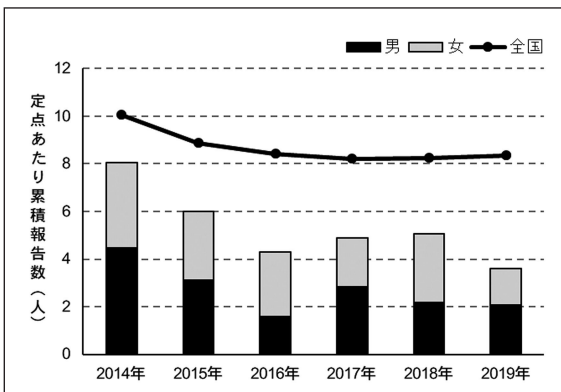


図49 淋菌感染症 年次別発生状況

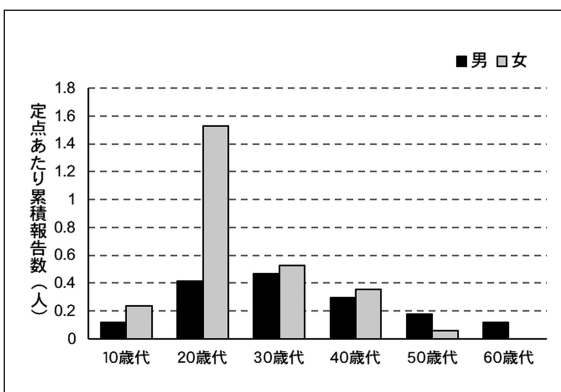


図50 淋菌感染症 年齢階級別発生状況

2.2.5 基幹定点における月報告の感染症（表5, 7）

i) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、定点あたり累積報告数が17.60人であり、前年（18.40人）とほぼ同数であった。年齢階級別では50歳代以上で85%を占めていた。

ii) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は、定点あたり累積報告数が0人であり、前年（0.20人）より減少した。

iii) 薬剤耐性緑膿菌感染症

薬剤耐性緑膿菌感染症は、定点あたり累積報告数が0.40人であり、前年（0.40人）と同数であった。年齢階級別では70歳代以上で報告された。

3 まとめ

全数把握感染症のうち、結核の届出数は304例であり、2017年から漸減傾向にあるが、毎年300例以上の届出が続いている。年齢階級別では、60歳以上の高齢者が全体の62%を占めていた。50歳代以下では、20歳代が最も多かった。重症熱性血小板減少症候群は4月、7月及び10月に各1例ずつの届出があり、2013年に感染症法で全数把握疾患となってからの累計は10例となった。つつが虫病は6月に2例、10月に1例の届出があり、2006年からの累計は21例となった。日本紅斑熱は3例の届出があり、2009年からの累計は34例となった。レジオネラ症の届出数は58例であり、昨年に続き多い届出数が継続し、例年（30例前後）の2倍程度の届出数となった。感染原因・経路は、入浴施設の利用（9例）が最も多かった。梅毒の届出数は191例であり、感染症法が施行された1999年以降で最多の届出となった。全国の梅毒患者の届出数は2010年以降増加傾向にあり、岡山県でも2014年以降年々増加してきた。全国と比較しても届出数の増加が著しく、2018年に続き、2019年も人口100万人あたりの報告数で全国3位の報告数となった。特に若年女性を中心に今後の発生動向に十分注意する必要がある。

定点把握感染症に関して、2018/19年シーズンのインフルエンザは、過去5シーズンと比較すると、2013/14年シーズンに次いで少なかった。全国の流行状況とほぼ同様の推移であった。

今後も引き続き、岡山県感染症情報センターでは、県内の感染症情報の収集・分析を迅速に行い、全国の感染症発生動向にも注意を払いながら、感染症対策の一助となるよう広く情報発信をしていきたい。

文 献

- 厚生労働省：2019年 結核登録者情報調査年報集計結果について、
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000175095_00003.html (2020.8.27 アクセス)
- 国立感染症研究所：全数報告サーベイランスによる国内の百日咳報告患者の疫学（更新情報）-2019年疫学週第1週～52週-、
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/pertussis-m/pertussis-idwrs/9463-pertussis-20200306.html> (2020.7.29 アクセス)

表1 感染症法に基づく届出対象感染症(2019年)

1. 全数把握感染症:全ての医師が、全ての患者発生について届出を行う感染症

<p>【 一類感染症 】 直ちに届出</p> <p>(1) エボラ出血熱 (2) クリア・コンゴ出血熱 (3) 痘そう (4) 南米出血熱 (5) ベスト (6) マールブルグ病 (7) ラッサ熱</p>
<p>【 二類感染症 】 直ちに届出</p> <p>(1) 急性灰白髄炎 (2) 結核 (3) ジフテリア (4) 重症急性呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 SARS コロナウイルスであるものに限る。) (5) 中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 MERS コロナウイルスであるものに限る。) (6) 鳥インフルエンザ(H5N1) (7) 鳥インフルエンザ(H7N9)</p>
<p>【 三類感染症 】 直ちに届出</p> <p>(1) コレラ (2) 細菌性赤痢 (3) 腸管出血性大腸菌感染症 (4) 腸チフス (5) パラチフス</p>
<p>【 四類感染症 】 直ちに届出</p> <p>(1) E型肝炎 (2) ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎含む) (3) A型肝炎 (4) エキノコックス症 (5) 黄熱 (6) オウム病 (7) オムスク出血熱 (8) 回帰熱 (9) キヤサヌレ森林病 (10) Q熱 (11) 狂犬病 (12) コクシジオイデス症 (13) サル痘 (14) ジカウイルス感染症 (15) 重症熱性血小板減少症候群(病原体がフレボウイルス属 SFTS ウイルスであるものに限る。) (16) 腎症候性出血熱 (17) 西部ウマ脳炎 (18) ダニ媒介脳炎 (19) 炭疽 (20) チクングニア熱 (21) つつが虫病 (22) デング熱 (23) 東部ウマ脳炎 (24) 鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9 を除く。) (25) ニパウイルス感染症 (26) 日本紅斑熱 (27) 日本脳炎 (28) ハンタウイルス肺症候群 (29) Bウイルス病 (30) 鼻疽 (31) ブルセラ症 (32) ベネズエラウマ脳炎 (33) ヘンドラウイルス感染症 (34) 発しんチフス (35) ボツリヌス症 (36) マラリア (37) 野兎病 (38) ライム病 (39) リッサウイルス感染症 (40) リフトバレー熱 (41) 類鼻疽 (42) レジオネラ症 (43) レプトスピラ症 (44) ロッキー山紅斑熱</p>
<p>【 五類感染症の一部 】 7日以内に届出(侵襲性髄膜炎菌感染症, 風しんおよび麻しんは直ちに届出)</p> <p>(1) アメーバ赤痢 (2) ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く) (3) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 (4) 急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く。) (5) 急性脳炎(ウエストナイル脳炎, 西部ウマ脳炎, ダニ媒介脳炎, 東部ウマ脳炎, 日本脳炎, ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。) (6) クリプトスポリジウム症 (7) クロイツフェルト・ヤコブ病 (8) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 (9) 後天性免疫不全症候群 (10) ジアルジア症 (11) 侵襲性インフルエンザ菌感染症 (12) 侵襲性髄膜炎菌感染症 (13) 侵襲性肺炎球菌感染症 (14) 水痘(入院例に限る。) (15) 先天性風しん症候群 (16) 梅毒 (17) 播種性クリプトコックス症 (18) 破傷風 (19) バイコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症 (20) バンコマイシン耐性腸球菌感染症 (21) 百日咳 (22) 風しん (23) 麻しん (24) 薬剤耐性アシネトバクター感染症</p>
<p>【 指定感染症 】 直ちに届出</p> <p>該当なし</p>

2. 定点把握感染症(五類感染症):指定した医療機関が、患者の発生について届出を行う感染症

①週単位報告

<p>【 小児科定点 】</p> <p>(1) RSウイルス感染症 (2) 咽頭結膜熱 (3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 (4) 感染性胃腸炎 (5) 水痘 (6) 手足口病 (7) 伝染性紅斑 (8) 突発性発しん (9) ヘルパンギーナ (10) 流行性耳下腺炎</p>
<p>【 インフルエンザ定点 】</p> <p>(1) インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く。)</p>
<p>【 眼科定点 】</p> <p>(1) 急性出血性結膜炎 (2) 流行性角結膜炎</p>
<p>【 基幹定点 】</p> <p>(1) 感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る。) (2) クラミジア肺炎(オウム病を除く) (3) 細菌性髄膜炎(髄膜炎菌, 肺炎球菌, インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く。) (4) マイコプラズマ肺炎 (5) 無菌性髄膜炎</p>

②月単位報告

<p>【 性感染症定点 】</p> <p>(1) 性器クラミジア感染症 (2) 性器ヘルペスウイルス感染症 (3) 尖圭コンジローマ (4) 淋菌感染症</p>
<p>【 基幹定点 】</p> <p>(1) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 (2) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 (3) 薬剤耐性緑膿菌感染症</p>

表2 全数把握感染症 月別患者発生状況

2019年

	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
一類感染症	エボラ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	クリミア・コンゴ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	痘苗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
二類感染症	結核	304	24	31	39	25	24	24	24	19	11	33	22	28
	重症急性呼吸器症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
三類感染症	細菌性赤痢	4	-	-	-	-	1	1	-	-	2	-	-	
	腸管出血性大腸菌感染症	62	1	-	3	-	8	15	8	5	10	2	6	4
四類感染症	パルチフ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	E型肝炎	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	ウエストナイル熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	A型肝炎	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	エボラ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	黄熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	オムスク出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	回帰熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	キヤサスル森林病熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	Q熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	狂犬病	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	コクシジオイデス症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ジカウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	重症熱性血小板減少症候群	3	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	
	腎症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	西部ウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ダニ媒介脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	炭疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	チクングニア熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	つが虫病	3	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	
	デング熱	7	1	-	-	-	1	-	2	2	-	-	1	
	東部ウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	鳥インフルエンザ(鳥インフルエンザ(H5N1)を除く)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ニバウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	日本紅斑熱	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	
	日本脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ハンタウイルス肺炎症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	Bウイルス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	鼻疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ブルセラ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ベネズエラウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	ヘンドラウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
発しんチフス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ボツリヌス症	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
マラリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
野兔病	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ライム病	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
リッサウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
リフトバレー熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
類鼻疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
レプトスピラ症	58	2	5	4	5	4	5	5	9	10	4	3	2	
ロッキン山紅斑熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アバ赤痢	14	1	1	-	3	1	-	1	4	-	1	-	2	
ウイルス性肝炎(E・Aを除く)	12	-	1	-	1	2	2	-	3	-	-	2	1	
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	32	5	2	4	1	3	-	-	6	4	4	1	2	
急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く。)*	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
急性性脳炎	19	2	2	2	1	1	3	1	-	3	1	1	2	
クリプトスポリジウム症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クロイツフェルト・ヤコブ病	5	1	-	-	1	-	-	-	2	-	-	1	-	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	6	-	1	-	2	-	-	1	-	2	-	-		
後天性免疫不全症候群	10	1	2	1	-	1	-	1	-	1	1	-	2	
ジニア症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
侵襲性インフルエンザ菌感染症	4	1	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-		
侵襲性髄膜炎菌感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
侵襲性肺炎球菌感染症	47	5	6	3	4	5	3	3	-	2	3	5	8	
水痘(入院例)	9	-	1	1	-	2	1	1	1	-	1	1	-	
先天性風しん症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
梅毒	191	10	12	13	19	14	24	18	19	15	29	4	14	
播種性クリプトコッカス症	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
破傷	3	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	
バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	3	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
百日咳	428	21	13	28	28	18	40	69	59	65	42	26	19	
麻疹	3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
麻しん	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
薬剤耐性アシネトバクター感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

*ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。

表3 全数把握感染症 年齢別患者発生状況

2019年

	総数	0~9歳	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳~
一類感染症	エボラ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	クリミア・コンゴ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	痘苗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ペーパー	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ラッサ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
二類感染症	急性灰白髄炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	結核	304	7	7	43	19	24	17	25	48	79
	ジフテリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
三類感染症	重症急性呼吸器症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	東呼吸器症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	鳥インフルエンザ(H5N1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
四類感染症	鳥インフルエンザ(H7N9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	コレラ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	細菌性赤痢	4	-	-	2	1	1	-	-	-	-
五類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	62	10	4	7	12	6	10	5	4	1
	腸チフス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	パラチフス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	E型肝炎	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	ウエストナイル熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	A型肝炎	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	エボラ出血熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	オーストラリア熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	オーストラリア熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	回帰熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	キヤサスル森林熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Q熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	狂犬病	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	コシジオイデス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ジカウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	重症熱性血小板減少症候群	3	-	-	-	-	-	1	-	-	2
	腎臓病	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	西部ウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ダニ媒介脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
炭疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
チングニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
つが虫	3	-	-	-	1	-	-	1	-	1	
デング熱	7	-	-	-	4	2	1	-	-	-	
六類感染症	東部ウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	鳥インフルエンザ(鳥インフルエンザ(H5N1)を除く)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ニバウウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	日本紅斑熱	3	-	-	-	-	-	2	-	1	-
	日本脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ハンタウイルス肺症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	Bウイルス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	鼻疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ブルセラ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ベネズエラウマ脳炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ヘンドラウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	発疹チフス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ボツリヌス症	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
マラリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
七類感染症	野兎病	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ライム病	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	リッサウイルス感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	リフトバレー熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	類鼻疽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	レジオネラ症	58	-	-	-	4	7	19	21	4	3
	レプトスピラ症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ロッキン山紅斑熱	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	アムニオニチス	14	-	-	-	1	1	7	4	1	-
	ウイルス性肝炎(E・Aを除く)	12	-	-	6	2	1	2	-	-	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	32	-	-	1	1	3	1	6	14	5
	急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く。)	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-
八類感染症	急性脳炎*	19	13	2	-	-	1	-	1	1	-
	クリプトスポリジウム症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	クロイツフェルト・ヤコブ病	5	-	-	-	-	-	-	2	-	2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	6	1	-	-	-	-	-	1	1	2
	後天性免疫不全症候群	10	-	-	5	1	2	1	1	-	-
	ジアルジア症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	4	-	-	-	-	-	-	1	1	1
	侵襲性髄膜炎菌感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	侵襲性肺炎球菌感染症	47	8	1	-	2	2	2	11	10	7
	水痘(入院例)	9	-	1	2	-	-	-	2	2	-
	先天性風しん症候群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	梅毒	191	1	14	67	42	37	17	6	4	3
九類感染症	播種性クリプトコックス症	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	破傷風	3	-	-	-	-	1	-	1	1	-
	バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	3	-	-	-	-	-	1	-	2	-
	百日咳	428	197	125	15	22	36	13	8	5	7
	麻疹	3	-	-	1	1	-	1	-	-	-
薬剤耐性アシネトバクター感染症	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

*ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。

表5 月報告 定点把握感染症（性感染症定点、基幹定点） 月別、定点あたり報告数

2019年

疾患名		総計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
性感染症定点	性器クラミジア感染症	計	18.35	2.00	1.24	1.59	1.65	1.53	1.59	1.47	1.53	1.18	1.94	0.88	1.76
		男	2.76	0.41	0.18	0.18	0.35	0.12	0.06	0.35	0.18	0.12	0.29	0.18	0.35
		女	15.59	1.59	1.06	1.41	1.29	1.41	1.53	1.12	1.35	1.06	1.65	0.71	1.41
	性器ヘルペスウイルス感染症	計	3.88	0.41	0.41	0.35	0.12	0.18	0.29	0.35	0.53	0.29	0.18	0.47	0.29
		男	0.06	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.06	—	—
		女	3.82	0.41	0.41	0.35	0.12	0.18	0.29	0.35	0.53	0.29	0.12	0.47	0.29
	尖圭コンジローマ	計	2.82	0.53	0.41	0.41	0.18	0.35	0.18	0.24	0.18	0.24	—	0.12	—
		男	1.88	0.47	0.29	0.29	0.06	0.18	0.12	0.12	0.12	0.18	—	0.06	—
		女	0.94	0.06	0.12	0.12	0.12	0.18	0.06	0.12	0.06	0.06	—	0.06	—
	淋菌感染症	計	3.59	0.41	0.53	0.35	0.35	0.24	0.12	0.24	0.35	0.47	0.18	0.18	0.18
		男	2.06	0.29	0.24	0.24	0.18	0.18	0.06	0.18	0.12	0.24	0.18	0.06	0.12
		女	1.53	0.12	0.29	0.12	0.18	0.06	0.06	0.06	0.24	0.24	—	0.12	0.06
基幹定点	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	計	17.60	1.40	1.40	1.40	1.40	1.80	1.00	1.40	2.00	0.60	2.20	1.80	1.20
		男	10.40	0.60	0.60	1.00	0.80	1.40	0.60	0.60	1.00	0.60	1.00	1.40	0.80
		女	7.20	0.80	0.80	0.40	0.60	0.40	0.40	0.80	1.00	—	1.20	0.40	0.40
	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	計	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		男	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		女	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	薬剤耐性緑膿菌感染症	計	0.40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.40	—	—
		男	0.40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.40	—	—
		女	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表6 月報告 定点把握感染症（性感染症定点） 年齢階級別患者報告数

2019年

疾患名		0歳	1歳～	5歳～	10歳～	15歳～	20歳～	25歳～	30歳～	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	70歳～	総計
性器クラミジア感染症	計	—	—	—	—	50	121	60	27	29	14	5	3	3	—	—	—	312
	男	—	—	—	—	6	14	8	4	6	2	2	3	2	—	—	—	47
	女	—	—	—	—	44	107	52	23	23	12	3	—	1	—	—	—	265
性器ヘルペスウイルス感染症	計	—	—	—	—	2	10	8	8	8	3	4	2	2	7	4	8	66
	男	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	女	—	—	—	—	2	10	8	8	7	3	4	2	2	7	4	8	65
尖圭コンジローマ	計	—	—	—	—	1	9	5	9	10	2	6	2	2	—	2	—	48
	男	—	—	—	—	—	4	2	6	9	1	4	2	2	—	2	—	32
	女	—	—	—	—	1	5	3	3	1	1	2	—	—	—	—	—	16
淋菌感染症	計	—	—	—	—	12	13	13	2	4	5	4	5	1	1	1	—	61
	男	—	—	—	—	5	6	9	1	3	4	2	3	—	1	1	—	35
	女	—	—	—	—	7	7	4	1	1	1	2	2	1	—	—	—	26

表7 月報告 定点把握感染症（基幹定点） 年齢階級別患者報告数

2019年

疾患名	0歳	1歳～	5歳～	10歳～	15歳～	20歳～	25歳～	30歳～	35歳～	40歳～	45歳～	50歳～	55歳～	60歳～	65歳～	70歳～	総計
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	3	4	—	—	—	1	—	1	—	1	3	4	5	4	4	58	88
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
薬剤耐性緑膿菌感染症	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2